

ごあいさつ

京都大学医療疫学分野の設置以来、早や10年が経過しました。ここに、10年のあゆみをお世話になりました皆様にご報告申し上げます。最初の年は、教員2名、大学院生2名の寂しいスタートでした。当時の准教授は他大学の教授(笠島)となり、当時の院生1期生は、当分野の准教授(山崎)、東京大学の准教授(東)となり、またこれまで輩出した院生および研究員は30名を数え、その約60%が大学の教員として活躍しております。今年は卒業生から教授も1名誕生しました。教室も若手教員や院生が増え活気に溢れています。まさに隔世の感です。

この10年間、当分野が何とか生き延び、またささやかですが成長し得たのは、ひとえに当分野を支え、応援して下さいったお一人お一人の方々のおかげであります。外からご叱正やご助言を下さった諸先輩、教育の至らない所をご支援して下さいった客員講師の皆様、いつも刺激を与えてくれた院生、少ない資源で多くの負担をシェアしてくれた教員、そして多忙な教育研究活動や雑務を支えて下さった事務補佐の方々、全ての皆様が含まれます。ここに改めて心より深謝申し上げます。

私の心の恩師である Thomas Inui 教授が祝辞および活動報告会へのコメント(29ページより)の中で述べておられますことを私は驚きを持って拝読しました。自分達ではそうでもないと思っていましたが、Inui 教授は我々を「Risk Taker」と定義されました。なるほど異端として辺境で活動し続けてきたとみられているのだと今さらながら実感できました。しかし Inui 教授はそのような活動こそが、中心部分を強化するともおっしゃって下さいました。このようなご指摘も、率直にうれしい驚きでありました。

Inui 教授だけでなく、多くの方々からお祝いと叱咤激励のお言葉を頂き、大変恐縮しております。お一人お一人のご期待を裏切らないように、今後も「Risk Taker」であり続ける所存です。懲りもせず、「型破り」を続けていくこととなりますが、同時にこれまで通り「原点と座標軸」だけはぶれないつもりであります。いい年をして皆様にご心配をおかけし大変申し訳なく存じますが、今後ともお見守りかつ厳しくご指導を賜りますれば大変幸甚でございます。

末筆ながら諸先生方のますますのご健康とご活躍を祈念いたします。

平成22年 秋の深まる京都にて
福原 俊一

